書写塗

書写塗として知られる書寫山で作られる漆器は、その美しさ、軽量さ、そして耐久性で有名である。その特筆すべき特徴は、朱色の光沢のある表面の下からわずかにのぞく黒漆の微妙な露出である。桐油を最上層に混ぜることによって特徴的な滑らかな肌触りが生み出される。また、黒漆と朱色の漆を芸術的に重ね合わせるという手法は、日本の先史時代にまでさかのぼることができる。ただし、この製法の完成は中世の頃のようなものである。この漆塗りは和歌山県の中中部にあった根来寺の工芸技術を有する僧侶によって完成された。根来寺は仏教の儀式に用いられる漆器や儀式用具の製造で有名であった。

1585年に、その当時は羽柴秀吉だった大名豊臣秀吉（1537-1598）によって根来寺が破壊されたとき、その技術を持つ僧侶の一部が圓教寺に逃げ込んだと伝えられている。僧侶たちは書寫山で同じような漆器を作り続けたと長い間考えられてきた。1985年にいくつかの作品が寺院の敷地内で発見された。それ以来、生産技術が復活し、独特の作品が再び流通し始めた。訪問者は、圓教寺の塔頭の1つである壽量院で、食器、お盆、調理器具を見て購入できる。予約をすれば、書写塗の漆器で精進料理を頂くこともできる。